



北原 義一

三井不動産
取締役副社長執行役員

経済同友会 つながる▶▶

リレートーク

#231

グローバル化?



鳥海 智絵

野村信託銀行
執行役社長

リーマン・ショックからもうすぐ10年。

経営破綻したリーマン・ブラザーズの欧州・アジア地域の人員などを承継した野村グループでは、東京だけでも1,000人を超える社員が入社し、私たちはいや応なく、そして予想もしなかったスピードで「グローバル化」することになった。そして、承継後のガバナンス体制やグローバル人材の育成といった課題の議論を重ねるうち、行き着くところ「日本人の英語能力問題」となったように思う。

私自身の「英語修行」歴を振り返ると、幼少期には親がいわゆる英才教育を施そうとしたようだが、さっぱり興味が持てず、中学校に入るまで英語に触れることはなかった。中学校・高等学校は英語教育に熱心で、そこでネイティブの授業を受けることもあったが、音から入るのは全然ダメ。少し分かってきたのは「SVOC」や単語の構造など、理屈を教わってからだろうか。

社会人になり、米国の大学院に留学したけれど、帰国後は英語に触れることもなく、使い物にならなくなっていたある日、役員の通訳を仰せつかった。案の定、恥をかき、反省しきりで毎朝ウォール・ストリート・ジャーナルの音声配信を聞くようになって、少しはマシになってきた。

リーマン承継後、アメリカ人の部下ができた。英語の会議も増えた。何も意見を言わないと了承したことになってしまう。それではまずい。言うべきときは言わなければ、と文法も気にせず発言するうちに、いつしか話すことに苦痛は感じなくなってきた。「日本人の英語能力問題」とは、話すべき内容を持ち合わせていないことに起因するのでは、と思うに至る。

「英語修行」でもう一つ有効だったのは、書くこと。今にして思えば、高校時代に毎日英語で日記を提出させられたことには意味があったのかもしれない。話せない⇔書けない。書けるようになれば、少なくとも書く速度では話せる。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控え、小学校から英語教育が始まっていると聞く。自らの経験を振り返ると、話すべき内容もなく、日本語がおぼつかないうちにオーラル教育を施す効果には少々疑問がある。とはいえ、かく言う自分は英語の聞き取りがいまだに苦痛で、グローバル化への道のりは思ったより険しい。

▶▶ 次回リレートーク

桑原 茂裕

日本銀行
理事